

唄を歌いたい

新田 由紀子

長年続けた邦楽の稽古を諦めてかれこれ二年になる。やめた理由は定年生活のダウンサイジングだ。邦楽界の習い事は時間も費用もかかる。週一回の稽古とはいえ、家でのおさらいは不可欠。通勤や外出中も、イヤホンで稽古録音を聴いたり、ずいぶん時間を費やしてきた。おまけに、邦楽器は値が張り維持費も半端ではない。発表会に流派一門の舞台のお付き合いにと、身の丈を越えた物入りを青息吐息で切り抜けてきた。経済活動の定年を迎えて、潮時かときっぱりやめてはみたが、三味線も鳴らさず唄わない生活は予想外に淋しい。

習い始めは民謡教室だった。ヨイシヨナ、コラサツサアで四、五年もたつと、綺麗な曲を歌いたくなって長唄に鞍替え。唄は習わず三味線だけの片稽古で、流派への勧誘もお付き合いもなく、粛々と十年以上を通った。会社帰りにあたふたと通ってくる素人さん相手では師匠の手綱もゆるむ。この素人さんときたら、対面稽古なのに、師匠の手や音を見聞させずに譜面の数字を追っていく習い方で曲をどんどん上げていく。結果は、十年たつてもそらでは全く手が動かない。

折よく、近所に唄い方の女師匠を見つけた。声も姿も綺麗な師匠は今をときめく家元の直弟子。お派手なことなんでもありと、大変なお付き合いが始まった。「あら、お三味線もおやりなの。なら仕込みますよっ」と、大劇場に二回も座らされ、会費と御礼がかさんで五年でギブアップ。

次に通ったのはカルチャーセンターの長唄教室。気楽なグループ稽古で、毎回喉が枯れるほど唄わせてくれる。芸大出の講師は流派トップに連なる気性のいいご婦人。邦楽界の因習を持ち込まず、合理的な発表会で盛り上がる。楽しく七年も続いたのに、突然カルチャー自体が営業終了となってしまった。名門の講師からは内稽古への引き継ぎもあつたが、ここで一区切りと諦めた。

身辺から三味線の音と唄が消えた。そこにコロナ禍が追い討ち、長唄どころか話し言葉も消えて久しい。